

新たに日本の虜になったもののコメント

ハンス＝カール・フォン＝ヴェアテルン (Dr. Hans Carl von WERTHERN)

駐日ドイツ連邦共和国大使

ドイツ連邦外務省が割り振るポストのなかで駐日ドイツ大使のポストほど素晴らしく、また面白いポストはない——少なくとも私はそう考える。だからこそこの春、次の任地が東京に確定したとの連絡を受けたときの喜びもひとしおだった。10年ほど前にベルリンの本省において「日本におけるドイツ2005/2006」の企画・実施を担当するタスク・フォースのトップに立ち、つづいて東アジア課長に就き、北京に公使として派遣された後に駐日大使に任命されるということは、いわばキャリアが一巡してスタート地点に戻ったということで、駐日大使となる準備万端整った思いがあった。日本が私の嗜好にマッチしていることは、いわずもがなであろう。

着任したのは3月初頭だが、はるか

以前から日本に滞在しているような気がする。今では「新任の」ドイツ大使と紹介されることもなく、自分の本来いるべき場所に落ち着いたアットホームな心地である。それは私だけでなく、日本に同行した妻と、三人娘の末っ子も同じ思いである。それも、私たちが日本政府と日本の社会に、各国の駐日大使に、在京の同胞に、ドイツ大使館スタッフに、とても暖かく迎え入れてもらえたからである。

職務面では着任早々に日独双方向の要人訪問がつづき、即座に渦中に入った。なかでも重要だったのはフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー独連邦外務大臣の東京・広島訪問と、安倍晋三日本国総理大臣のドイツ訪問である。さらに、独連邦首相の2015年訪日が発表されたこともあり、ドイ

ツの政界および一般世論において日本がこれから一層注目されるようになることが大いに期待される。

私は東京に着任する前にハノイと北京での駐在経験があるため、極東には慣れ親しんでいることも多い反面、日本で全く新しいことに会うことも頻繁にある。そのひとつが日本語で、現在一生懸命学んでいるところだが、はたしてどこまで進歩するか分からない。少しずつ理解できるようになったからこそかもしれないが、「カスミガセキ」とか「オモテサンドウ」といった東京の地名には実に詩的な、神秘的ともいえる響きを感じる。また、昔から好きだった和食の魅力は、この間さらに高まった。和食の魅力は味覚と、ほぼ毎回楽しめる芸術的ともいえる素晴らしい盛り付けのみに拠るもの

目次

巻頭寄稿文	
新たに日本の虜になったもの・・・	
フォン＝ヴェアテルン	1～2
インタビュー	3
人的交流事業	
青少年交流事業アラムナイ会合	4
人的交流事業	
日独若手専門家交流	5
事業報告	6
2014年事業案内	7
人的交流事業一覧	8



ここ数年間ベルリン日独センターの会期系事業で連続的に取り上げてきたテーマ「コンプライアンス」(企業の法令遵守)を新たな側面から考察する国際シンポジウム「日本をはじめとするアジア主要国における社外取締役制度の導入状況について」(2014年7月17日～19日)を、マックス・プランク学術振興協会所属外国社会法・国際社会法研究所および独日法律家協会の協力を得て開催しました。

ではなく、非常に細部にまでゆきわたるこだわりにもある。たとえば、焼き魚に半分に切ったカボスを添える場合、指先で絞るとカボスの汁が流れるべきところに流れるような小さな切り目が入れている。これは、ある種シンボルである——モノや自分自身に対する日本人の姿勢を如実に語るシンボルである。

日本で暮らすようになり、日本の歴史や文学や美術を全く新たに、今までとは違った目でみるようになった。日本人の整理整頓好き、規律正しさ、物静かなところは気に入っているが、原宿を闊歩するティーンのコスプレや、乳母車のような乗り物に座らされて連れ歩かれる小型犬など東京で見かけるクレージーなシーンを不思議にも思う。そして、おそらく生涯誰も答えてくれないであろう疑問に遭遇することもある。「なぜ日本人女性の多くは2サイズ小さすぎるツッカケを履き、2サイズ大きすぎるパンプスを履くのか。」

しかし、楽しいことばかりでもない。福島原子力発電所を訪問したときは、2011年の大災害を処理するために人事が尽くされていることは理解できたが、そこに問題が存在し、その問題がそもそも解決可能だと仮定しても、解決には数十年は要することも明白だった。また、プライベートに東北地方を訪ね、岩手県東海岸線を巡った際は、地震と津波による被害がまだ克服されていない現状を目の当たりにし、東北地方が経済面でもダメージを負ったとの印象を得た。しかしながら、このような打撃の後に再出発する人々の粘り強さおよび気丈さもみることができた。

そして、山形県の出羽三山のひとつ羽黒山の参籠所の齋館で一泊した際は、自分が自然と一体になった感覚を得た。ここが修験道を中心とした山岳信仰の場であり、厳しい修行と断食のすえに土中に作られた石室のなかで生きながら即身仏となった人々がいたとガイドブックで読んだときは極めて奇異に感じたものだが、みずか

らの穢れが浄化された感覚を得た後は、修験者を少しは理解できるようになった。そしてまた、大震災で破壊された結果、美と調和という形容詞が全く当てはまらない市町村をみた後に羽黒山の美しい自然と建造物に出会い、救われる思いがした。

ドイツ大使の業務のなかで私自身が最重視するのは、あらゆる分野のあらゆる年齢の日本人との交流である。政治家や高級官吏との交流もあれば、私が駐日ドイツ大使であることに気付いて道端で話しかけてきて、自分のドイツ滞在経験を話してくれた高校生との交流も大事である。記憶に新しいのは、サッカー世界選手権の決勝戦である。在日ドイツ大使館とゲーテインスティテュート・ドイツ文化センターが協力してパブリックビューイングを企画したが、キックオフが日本時間で月曜日の午前4時だったため、ゲーテインスティテュート館内の300席が閑散としたままになることを実は懸念していた。しかし、実際には900人の観客が集まり、その大半が若い日本人で、ドイツチームのユニフォーム姿の人も多く、一緒に熱狂し、歌い、歓声をあげ、最後にドイツの勝利を祝った。これは、優勝よりもはるかに多くの高揚感を与えてくれた極めて貴重な体験だった。

だからこそ、私を再び魅了する国「日本」においてこれから過ごせる年月が楽しみである。



「jdzb echo」読者の皆様

東京とベルリンが友好都市提携を締結して20周年にあたる記念すべきこの年の秋に、ベルリン日独センターは同友好都市提携の旗印を掲げる2件の会議系事業を実施しますが、これら事業から両都市に役立つ情報が発信されるとともに、市民同士の出会いが促進されることを祈ります。10月には、第19代東京都知事に選出された舛添要一知事のベルリン訪問が予定されていますが、同訪問は両都市の市民交流のみならず、政治面も含めた日独の交流全体に新たな弾みをもたらすことでしょうか。まさに、フォン＝ヴェアテルン(Dr. Hans Carl von Werthern)駐日ドイツ大使が巻頭寄稿文で述べておられる期待が満たされるのです。

人的交流は政治レベルだけでなく、民間レベルでも重要です。とりわけ旅行シーズンにあたる夏場は交流に適した時期のため、本紙ではベルリン日独センターが実施する人的交流事業の紹介に大きくスペースを割きました。これら事業の目的は一過性の交流の機会を提供することではなく、交流を通じて得た知識を普及していただくことにあります。そしてまた、交流事業を通じて日独間のネットワークを持続可能な形で強化するとともに、若い人々も取り込んでゆきたいと考えます。そのためにも、過年度にベルリン日独センターが提供するさまざまな人的交流事業に参加された方々とのアラムナイ(同窓生)活動に一層力を注いでゆく所存です。

本紙記事を読まれた皆様の、日独交流への食指が動くことを願います。

フレデリケ・ボッセ(Dr. Frederike Bosse)
ベルリン日独センター事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙「jdzb echo」は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター(JDZB)
編集 ミハエル・ニーマン
(Michael Niemann)
E-Mail mniemann@jdzb.de

本紙「jdzb echo」はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書館の開館時間は火曜日と水曜日正午～午後6時、木曜日午前10時～午後4時です。蔵書借り出しも可能です。

東京とベルリンが友好都市提携を締結して2014年で20周年になります。この関連でベルリン日独センターは秋に2件の日独シンポジウムを実施いたします。1件は東京で開催する「アントレプレナーシップ」、もう1件はベルリンで開催する「スマートシティ&ソーシャルシティ」です。どちらのシンポジウムも東京都庁およびベルリン州政府の協力を得て開催予定です。この関連で、本紙は(有)ベルリン・パートナーのメラニー・ベア総裁 (Melanie BÄHR) にお話をうかがいました。

編集部:1994年5月にベルリンと東京都は友好都市提携に調印しましたが、その意義と、両都市間の協力分野についておうかがいします。

ベア:ベルリンと東京にとって相互の緊密な経済関係およびナレッジ・トランスファー(知識移転)ならびに文化交流は極めて重要です。ベルリンと東京はともに大都会で、進展する都市化、資源の欠乏、高齢化社会への取り組み、地球温暖化といった類似する複雑な課題を抱えており、その解決策を模索中です。そこで、ベルリンで開催する2015年度アジア太平洋週間では、スマートシティ(先端技術を駆使した環境配慮型都市)をテーマとする国際交流の場を提供します。それより以前、すなわち既に2014年に実施するハイライト事業が、友好都市提携20周年を記念して東京で開催するベルリン週間で、両都市のアートシーンのネットワーク構築を目指します。

さらに、さまざまな国際フェアの機会を利用し、ベルリンと東京のそれぞれの中核的テーマのネットワークも構築します。一例ですが、みずほ銀行の調査によりますと、ヨーロッパのバイオテクノロジー・クラスターのなかでもベルリン・ブランデンブルクは重要なクラスターのひとつです。そこで、本年5月に東京で開催された国際バイオテクノロジー展 BIO TECH 2014において、バイオテクノロジー産業立地としてのベルリンの側面を紹介しました。あるいは本年2月に東京で開催された第6回日独環境フォーラム「再生可能エネルギーの導入促進を目指して——エネルギー供給から蓄エネルギー、モビリティまで」では、ベルリン州エージェンシー・イーモビリティeMOが「ベルリン・ブランデンブルグにおけるeモビリティ」の活動や模範事例を紹介しました。

編集部:ベルリンと東京が協力して秋に開催する日独シンポジウムのひとつ「アントレプレナーシップ」(起業・企業家精神)では、ベルリンと東京におけるスタートアップ企業の調査、ネットワーク、ベンチャーキャピタル等を取り上げる予定です。ベルリンの経済にとって、起業はどれほど重要ですか。

ベア:ベルリンは起業のハブです。ドイツ全国平均で12分に1件の企業が誕生していますが、ベルリンでは平均を上回る起業がみ

れます。それは、ベルリンに産学の緊密なネットワークが存在することで、スタートアップに最適な前提条件が整っているからです。とりわけデジタル経済およびライフサイエンス部門ではダイナミックな起業展開がみられます。起業は雇用を創出し、国際資本をベルリンに呼び寄せることにつながります。この発展をさらに後押しするために現在、起業を目指す人を対象とするワンストップ相談所となるスタートアップユニットの設立を進めています。同ユニットのコーディネーションを担当するのが私ども(有)ベルリン・パートナー(ベルリン市経済振興公社)です。

編集部:5月にベルリンのスタートアップを紹介するイベント「ベルリン・イノベーション・ミートアップ」が初めて東京で開催されましたが、そこではベルリンのスタートアップ企業を紹介するだけでなく、共同研究ないしは製造・販売で協力可能な日本のパートナー企業が募集されました。(有)ベルリン・パートナーも同イベントに参加し、ベルリンのスタートアップ企業を支援されましたが、将来的にどのような成果を期待していますか。

ベア:「ベルリン・イノベーション・ミートアップ」では経済立地およびテクノロジー立地の側面からベルリンを紹介しました。今後もベルリン外の企業やベンチャーキャピタル拠出者に対し、産業立地としてのベルリンの多様な側面を積極的に紹介し、ベルリンの評価向上につなげることを目指します。スタートアップ企業にとっては、早期に国際的なネットワークを構築することが極めて重要で、(有)ベルリン・パートナーは国外派遣団の編成や、各種イベントを通じて支援します。

編集部:2件目の日独シンポジウムのテーマは「スマートシティ&ソーシャルシティ」です。スマートシティ構想と、ベルリンにとっての意義を教えてください。

ベア:近代大都会が未来の本質的な課題に対応し得るように全ての先端技術および組織構想を集約させるのがスマートシティ構想です。地球温暖化と少子高齢化に対する回答としてスマートシティ構想を導入することで都市圏の魅力向上も達成可能です。そのために、インフラ面でのイノベーション、資源の持続可能な利用、大気汚染物質の削減



© IHK Berlin

などを中心に据えます。ベルリンではいたるところでスマート(理知的)なテクノロジーやストラクチャーを生み出す発展プロジェクトがみられますが、その意でベルリンはヨーロッパにおけるスマートシティの先駆者といえましょう。たとえばベルリン工科大学が、シェーネベルク地区にあるアルフレッド・メッセル設計の歴史的なガスタンクを囲むようにして設けたEUREFキャンパスは、エネルギー効率性を最善化させた建物やスマートグリッド(次世代送電網)を用いる再生可能エネルギー利用を通じて、2018年までに二酸化炭素の排出を限りなくゼロに近づけるキャンパスに生まれ変わる予定です。また、ヘルスケア産業の例では、ベルリンのバイオトロニック社が世界初のホームモニタリング機能搭載のペースメーカーを開発し、心臓疾患患者の遠隔医療を可能にしました。

編集部:ベルリンのイノベーション力ないしはコンピテンシーを特別に表現するスマートシティ部門——あるいは、スマートシティ・クラスター——というのでしょうか——がありますか。

ベア:スマートシティはクラスターの境界を越える将来指向的なエリアで、「エネルギー工学・交通」「モビリティ」「物流・情報通信工学」「メディア」「創造経済(文化産業)・光学・ヘルスケア経済」といったベルリンとブランデンブルクの五つのクラスターと横断的にかかわる学際的なエリアです。ベルリンでは既に約40件のプロジェクト、300人以上の関係者がスマートシティ構想の開発および実現に向けて従事していますが、なかでもeモビリティが中核的な役割を占めます。ベルリンは現在既に指導的な役割を担っており、向こう数年間でヨーロッパの模範的大都会に発展するでしょう。

日本とドイツにおける子どもの権利——「児童の権利に関する条約」の実践に向けた日独の取り組み

ヨーク・マイヴァルト(Prof. Dr. Jörg MAYWALD)ドイツ子どものための同盟事務局長、ポツダム専門大学客員教授

日本とドイツはともに国際連合の「児童の権利に関する条約」を批准している。すなわち、本条約が謳う保護や援助を受ける権利、養育される権利、教育に関する権利、意見を表明する権利、参加する権利などを全ての子どもに保障する義務をみずからに課しているのである。そこで、ベルリン日独センターが運営する日独青少年交流事業のアラムナイ(過年度の参加者)を集めて開催した会合(2014年6月2日)で本条約の具体的な実現状況をまとめ、未だ不備な分野を調べ、その改善に向けた方法を模索した。

会合の基調講演者として、「川崎市子ども夢パーク」の設立者のひとりである同パーク所長の西野博之氏が招かれた。西野報告によると、日本全国で非常に大勢の児童・生徒がストレスをため込んでいる結果、校内暴力やいじめが多発し、不登校やひきこもりが増え、年間300人以上の小中高生の自死にいたっている。

この問題と、そこから社会全体に波及する悪影響を真摯に受け止めた川崎市は、国連「児童の権利に関する条約」が掲げるさまざまな権利を具現化する目的で、「川崎市子どもの権利に関する条例」を青少年と大人の共同作業で作成した(2000年12月制定、2001年4月施行)。その3年後に「川崎市子ども夢パーク」がオープンした(2003年7月)。

「川崎市子ども夢パーク」の事業は、(1)子どもの参画活動拠点としての「川崎市子ども会議」の事務室、(2)全ての子どもに開かれた冒険遊び場(プレーパーク)、(3)不登校児童・生徒の居場所としての「フリースペースえん」の3本柱によって成り立つ。また、保護者に対する相談・援助活動も必要に応じて実施している。年間利用者数は乳幼児から大人まで約9万3000人(2013年度)で、西野氏の言葉を借りると「子どもを既存の制度に合わせようとするのではなく、子どものいのちのほうに制度や仕組みを引き寄せる」ことをモツ

トーに事業が進められている。

西野氏の講演の後に筆者(国連「児童の権利に関する条約」ドイツ国内履行のためのナショナルコアリション・スポークスマン)が、ドイツの視点からコメントした。先ず、高度先進工業諸国の青少年が既に幼少期より家族、教育機関、社会からの多大な期待にさらされている結果、多くの青少年が努力することを拒絶したり、ひきこもってしまう状況を指摘した。そして、過密な時間割と認知偏重の教育観を背景に、国連「児童の権利に関する条約」第31条1項「締約国は、休息および余暇についての児童の権利ならびに児童がその年齢に適した遊びおよびレクリエーションの活動を行い、ならびに文化的な生活および芸術に自由に参加する権利を認める」ということが本当に保障されているのか、という質問を投じた。

筆者は、川崎市の取り組みの根底に工芸、ものづくり、創作活動、スポーツ、音楽、社会性、感情面を取り込んだホーリスティックな教育観が存在することに感銘を受けた。大人による厳しい規則を排除し、自分自身で経験を積み、その経験を基に成長していくことのでき

る自由な空間が子どもの健全な成長にとって必須であることを「川崎市子ども夢パーク」は立証している。

西野氏の講演のなかで、「川崎市子どもの権利に関する条例」の策定に参加した子どもたちがまとめた「子どもから大人へのメッセージ」が紹介されたが、その実に卓識な見解に感動したので、ここに引用する。「まず、大人が幸せにしてください。大人が幸せでないのに子どもだけ幸せになれません。大人が幸せでないとは虐待とか体罰がおきます。条例に、子どもは愛情を持って育まるとありますが、まず、家庭や学校、地域のなかで大人が幸せでいて欲しいのです。子どもは、そういうなかで安心して生きることができます。」(川崎市子ども権利条例策定子ども委員会)

筆者のコメントの後に、西野氏と会場に集まったアラムナイを交えたディスカッションがつづいた。「川崎市子ども夢パーク」の原則を他の場所でも実現させるにはどうすべきか、国連「児童の権利に関する条約」に健康な環境条件で暮らす権利を追加する必要があるか、子どもの権利のために今まで以上に保護者を取り込むにはどうしたらよいか、といったさまざまなテーマを取り上げた。本会合を通じて多くの示唆を得ることができ、今後も同様の交流がつづくことを強く願うしだいである。



西野博之氏と著者のヨーク・マイヴァルト氏(Prof. Dr. Jörg MAYWALD)

日独若手専門家交流ドイツ研修旅行参加報告

山本洋平、筑波大学数理物質系准教授

2014年度の日独若手専門家交流(J E X)のドイツ研修旅行が2014年6月26日から7月8日の日程で実施され、ドイツ国内の研究機関(3大学、8研究所、2企業)を回り、研究開発に関する情報交換と交流を行った。2014年度のテーマは、「ナノテクノロジーと材料科学、特にカーボンナノチューブおよびグラフェン」で、公募により選ばれた8名(大学教員3名、独法研究所研究員1名、企業研究者3名、大学院生1名)が参加した。6月26日に6名がドイツ入りし、諸々の事情により1日遅れて27日に2名がプログラムに合流した。

27日(金)はミュンヘン市内の3研究機関(ドイツ研究センターヘルムホルツ協会所属環境保健研究所・肺疾患研究センター、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン、ミュンヘン工科大学)を訪問し、それぞれの研究機関で実施されている研究について説明を受けた。夕方、イギリス庭園の屋外ビアガーデンにて夕食をとった。週末の28日(土)は昼過ぎまで自由時間で、午後2時よりドイツ博物館にてドイツの近代から現代までの科学技術の発展に関する説明を受けた。夕食の後、ミュンヘンフィルハーモニー管弦楽団のクラシックコンサートを鑑賞し、安らかなひとときを過ごした。翌29日(日)はあいにくの雨であったが、バイエルン料理として有名な白ソーセージを堪能した後、ミュンヘン・レジデンツ宮殿もしくは美術館を訪れた。夕方にはミュンヘンを発ち、翌日の訪問地であるボンに向かった。

30日からの五日間は、毎日1ヶ所から3ヶ所の研究機関を訪問し、夕方には次の目的地に向けて出発というハードな日程であった。30日(月)は、午前中ボンの独連邦教育研究省にてドイツの研究や教育のシステムについて説明を受けた。昼食後、鉄道にてマインツに向かい、マックス・プランク学術振興協会所属高分子研究所を訪問し、研究所と代表研究について説明を受けた。研究室見学の後、次の目的地であるマンハイムへ移動した。7月1日(火)は、ドイツ最大の化学会社であるビーエーエスエフ(BASF)を訪問した。まずBASF全体に関する説明を受け、バスで社内を移動しながらガイドを受けた。午後は、BASFの研究者と日本側参加者がそれぞれの研究を発表し、議論と情報交換がつづいた。夕方、次の目的地であるシュツットガルトにバスで移動し、翌日訪問するフラウンホーファー応用研究振興協会所属生産工学自動化研究所の研究者と夕食を共にした。2日(水)は、同研究所にて双方の研究に関する発表を通じて意見を交換した。また、元マックス・プランク学術振興協会所属固体研究所のロート教授(Prof. Siegmur Roth)よりグラフェ

ンに関連する講義を受けた。夕方には飛行機でドレスデンに飛び、翌日訪問するフラウンホーファー研究所のデルフラー博士(Dr. Susanne DÖRFLER、ドイツ側J E X参加者)にドレスデン市内をご案内いただいた。3日(木)は、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツ学術連合所属固体材料研究所、ドレスデン工科大学、フラウンホーファー応用研究振興協会所属レーザー表面研究所を訪れ、双方の研究発表を通じた意見交換があった。研究室訪問を終え、最終目的地であるベルリンへ電車に向かった。4日(金)は、午前中パウル・ドルーデ固体エレクトロニクス研究所を訪問し、グラフェン成長に関する研究紹介を受けた。午後は2グループに分かれ、ドイツ研究センターヘルムホルツ協会所属物質エネルギー研究所(放射光施設 BESSY II)もしくはブルカー・ナノ有限会社を訪問した。夜はドイツ側J E X参加者(2013年11月~12月の訪日団および過年度の参加者若干名)と合流し、日本料理屋ダルマにて夕食を共にした。

5日(土)は、J E Xの日本側参加者とドイツ側参加者が一堂に集まり、ベルリン日独センターにてワークショップが開催された。まず坂戸勝ベルリン日独センター副事務総長と在独日本大使館の梅田裕介書記官より開会のご挨拶をいただき、つづいて日本側、ドイツ側双方が45分ずつ、今回の研修旅行についてのプレゼンテーションを行った。昼食の後、参加者全員が各自の研究を発表した。最後に本プログラムに関するディスカッションがつづき、ワークショップは終了した。

6日(日)は、午前中は自由行動、午後は日本語ガイドによるベルリン市内観光、旧テンペルホーフ空港敷地でのセグウェイの試乗体験とピクニック

が催された。最終日の7日(月)は、午前中はマックス・プランク学術振興協会所属フリッツ・ハーバー研究所にて研究紹介を受け、昼からベルリン市内で昼食と買い物をしたのち、テゲル空港より名残惜しみつつデュッセルドルフ経由で成田へ発った。

総括として、これほどまでに高密度な研究訪問ツアーは他にないのではないかとと思われるくらい内容が充実していた点を強調したい。スケジュールは極めてタイトではあったが、いずれの研究機関でも多くのことを学ぶことができた。また、週末はミュンヘンとベルリンで文化交流や観光も十分に楽しむことができた。さらに、ドイツの研究者とだけでなく、日本側参加者間でも多くの情報交換ができた点にも大きな意義がある。今後、日独間のみでなく、日本国内においても共同研究などを通じて新しい研究の芽が出てくることを期待できる。また、ワークショップで印象的であったのは、日本側参加者はドイツの研究機関を、ドイツ側参加者は日本の研究機関を、非常にすばらしいと語ったことである。当該研究分野においてドイツと日本は、世界的に最先端の研究を展開しているということである。

最後に、本プログラムを企画・運営いただいたベルリン日独研究センターのタチアナ・ヴォネベルク(Tatjana Wonneberg)とラブシュ麻衣(Mai Rapsch)に、厚くお礼申し上げます。訪問先の選定から移動・宿泊など全てにおいて、参加者が一切不便を感じることなくプログラムを進めることができたのは、ひとえに両氏のご尽力の賜です。また、本旅行にご同行下さり、ドイツ国内の研究の現場に関して多くの情報をご提供いただきましたベルリン工科大学の井上茂義教授にも厚くお礼申し上げます。

最後に一言、J E X 最高!



ドレスデンのツヴィンガー宮殿での記念撮影。敬称略で左から、小川新平(三菱電機)、乗松航(名古屋大学)、森川生(東京大学院生)、殿内規之(NEC)、二川秀史(HONDA)、ラブシュ麻衣(Mai Rapsch、ベルリン日独センター)、スザンネ・デルフラー(Susanne Dörfler、ドレスデン工科大学)、山本洋平(筑波大学)、小川修一(東北大学)、村山周平(放射線医学総合研究所)。



在独日本国大使館を会場に開催された日独エネルギーフォーラム「エネルギー分野における日独協力」(2014年6月25日)において開会の挨拶を述べる中根猛駐独日本国大使。ウーヴェ・ベックマイヤー(Uwe BECKMEYER) 独連邦経済エネルギー省政務次官も参加した本フォーラムでは、エネルギー政策転換後のドイツの状況およびエネルギー部門における日独協力に関する活発な討議がみられました。



学者や研修者および教師と生徒の共同事業の促進を目指し、第2回思索工房「21世紀における日本——変遷過程中的の社会」発表会(2014年6月24日)を開催しました。本事業は、ベルリン自由大学およびベルリンの高等学校2校の協力ならびにロバート・ボッシュ財団の資金拠出を得て実現したものです。



第128回ダーレム音楽の夕べは「義太夫の語りと音楽」と題する素浄瑠璃公演(2014年6月27日)で、訃傳の会の竹本千歳大夫(太夫)、豊澤富助(三味線)両氏により「摂州合邦辻——合邦庵室の段」が上演されました。



2014年度オープンハウスでは「風呂敷ワークショップ」、パネルディスカッション「ドイツと日本におけるエネルギー政策」、盆石デモンストレーション、インターアクティブなサウンドインスタレーション(福永敦)など新たな出し物を準備しました。フィナーレを飾ったのはレナード衛藤(太鼓)およびバジュー(ドラム)の両氏によるパーカッションコンサートでした。



雨田光弘「音楽の絵画展」(2014年6月11日～8月15日)では、音楽を奏でる個性的な猫をはじめ、さまざまな動物が登場する作品が展示されました。なかにはモデルとなった実際の音楽家を思い出させるような作品もあります。クラス単位で観覧に訪れた学校もあり、そのような折にはベルリン日独センター担当者が絵画のエピソードを披露しました。



平松礼二講演会「モネへのオマージュ」(2014年6月12日)では、画伯みずから自分の画風に影響を与えた要素やジャポニズムについて、また日本画に用いる画材について説明しました。聴衆にとって本講演会は画伯の工房の一端を垣間みるまたとない機会でした。

会議系事業

国際社会における日独の共同責任

国際会議「アフガニスタン——学んだ教訓と今後の道」

協力機関：コンラート・アデナウアー財団(ベルリン)、公益財団法人世界平和研究所(東京)
2014年9月24日～25日、東京開催

国際ワークショップ「沈み帯における大型地震と津波——予測可能性およびリスクアセスメントへの貢献」

協力機関：アテネ国立観測所、国際測地学および地球物理学連合(ポツダム)、国際自然災害協会(ロンドン)、ヨーロッパ地球科学連合(ミュンヘン)
2014年10月6日～8日、ロドス島(ギリシア)開催

第五回日独安全保障ワークショップ

協力機関：財団法人日本国際問題研究所軍縮・不拡散促進センター(東京)(tbc)
開催予定日：2014年12月

少子高齢化社会

日独シンポジウム「文化政策による中小都市の再生——ドイツ・中欧と日本の対話」

協力機関：日本文化政策学会(東京)、ザクセン文化基盤研究所(ゲルリッツ)
2014年9月4日～7日、ベルリンおよびゲルリッツ開催

学術振興を通じた社会発展

日独シンポジウム「児童の健康管理」

協力機関：千葉大学、フンボルト大学医学部附属病院(ベルリン)
2014年12月1日

国家、企業、市民社会

日独シンポジウム「都市における企業家の育成——東京・ベルリンにおけるベンチャー企業情報」

協力機関：東京都庁、ベルリン州政府
2014年9月19日、東京開催

日独シンポジウム「国民国家の尺度構成——

日独各々の現代における宗教、国語、民族意識」
協力機関：マールブルク大学、獨協大学(東京)、アジア政経学会(東京)、ドイツ・アジア協会(ハンブルク)
2014年10月10日～11日

日独シンポジウム「スマートシティ&ソーシャルシティ」

協力機関：東京都庁、ベルリン州都市計画環境庁
2014年10月28日

日独会議「信頼・信用と不信用」

協力機関：現代日本社会科学学会
2014年11月21日～24日

諸文化の対話

日独学生セミナー「欧州政策」

協力機関：オツェンハウゼン欧州アカデミー、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
2014年9月15日～16日

特別事業

日独フォーラム第23回全体会議

協力機関：独連邦外務省(ベルリン)、日本国外務省(東京)
2014年11月5日～6日

文化事業

ダーレム音楽の夕べ

「江戸音楽の楽しみ」箏と三味線の繊細な音色

共催：ケルン日本文化会館(国際交流基金)
2014年9月12日、19時開始

アートと音楽の出会い：コンサート「バロック音楽」
青木洋也(カウンターテナー)、高橋明日香(ブロックフルート)、金一恵(チェンバロ)

2014年11月12日、18時30分開始
(「影の間にあるもの」四方、ザイツ二人展オープニングと同時開催)

クリスマスコンサート

2014年12月中旬、19時30分開始

展覧会

GUP-py、ハリエット・グロス二人展「ge schicht et (多層的な光景)」

オープニング：2014年9月11日、19時開始
展示期間：2014年9月12日～10月30日

「Thinking of Energy — From the Experience of Fukushima」若手アーティストの集まり「団・DANS」

会場：独連邦外務省(ベルリン)
協力機関：独連邦外務省(ベルリン)
展示期間：2014年10月17日～11月13日

「影の間にあるもの」四方奈々子、シュテファン・ザイツ二人展(絵画と彫刻)

オープニング：2014年11月12日、18時30分開始
(コンサート「アートと音楽の出会い」と同時開催)
展示期間：2014年11月13日～2015年1月16日

講演会

奈良岡聰智講演会「第一次世界大戦中のドイツにおける日本人抑留者の運命」

協力機関：ベルリン日独協会、ケルン日本文化会館(国際交流基金)
2014年9月2日、18時30分開演

平野啓子講演会「日本の語り文化」

2014年11月18日、19時開演

人的交流事業

- ・日独若手専門家交流
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム
- ・日独青少年指導者セミナー
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム

各プログラムの詳細はwww.jdzb.de → 人的交流事業

書道講座

ベルリン日独センターは9月3日より新たに書道講座を開講します。授業は水曜日の18時から19時30分までで、好きな日だけ出席する形式です。

受講料は1回券10ユーロ(割引なし)、10回券90ユーロ、割引対象者の場合は70ユーロです。初めての人は一回目だけ無料参加可能です。

講師には第50回創玄展(2014年)で秀逸、第65回毎日書道展(2013年)で秀作賞をはじめ数々の受賞のある皆川彩雨氏をお迎えしました。

詳細はベルリン日独センターURL (www.jdzb.de → 日本語講座) をご参照ください。

展覧会観覧時間

月曜日～木曜日10時～17時
金曜日10時～15時30分

ダーレム音楽の夕べの申込み受付開始日は追ってお知らせします。

会場についてほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。
詳しくは www.jdzb.de → 個別事業



2014年度「日本人ジャーナリスト欧州招聘事業」(テーマ:ドイツとヨーロッパの今):帰国後に発表されたドイツのエネ政策関連記事(数例抽出)。



2013年度ヤングリーダーズ・フォーラム:駐日ドイツ大使の公邸における集合写真

ベルリン日独センターは対象者別にさまざまな人的交流事業を実施しております。

独連邦家庭・高齢者・女性・青少年省および日本の文部科学省の委託で実施する3件のプログラムはいずれも2週間の相手国派遣事業です。

- 研修プログラム「日独青少年指導者セミナー」
- 日独勤労青年交流プログラム
- 日独学生青年リーダー交流プログラム

日独のヤングリーダーズ(幹部候補生)に国際交流の場を提供する日独ヤングリーダーズ・フォーラムの中心となるのは、テーマを設定して開催するサマースクール(ワークショップおよび視察研修旅行の二部構成)です。財源はロバート・ボッシュ財団から拠出されます。

日独若手専門家交流は民間の研究所または公の研究機関に勤める日独の青年研究者を相手国に派遣する事業で、自分の研究分野を視察し、ナレッジ(知)交換と意見交流の機会を提供します。財源は独連邦教育研究省および日本の外務省の拠出です。(本紙5頁に2014年度報告)

ロバート・ボッシュ財団は「日本人ジャーナリスト欧州招聘事業」および「ドイツ人ジャーナリスト日本派遣事業」の資金も拠出しています。ベルリン日独センターは前者の企画・実施を担当し、後者の場合はコンサルタントとして協力しています。



2013年度日独勤労青年交流プログラム:フルステンベルクにおける合宿セミナーの班別ディスカッション「ワークライフバランス」の結果発表。



2013年度日独学生青年リーダー交流プログラム:フルステンベルクにおける合宿セミナー。



2014年度研修プログラム「日独青少年指導者セミナー」:ベルリン日独センターにおけるドイツ代表団事前研修会。